

氏名 : Sharareh MOTALLEBI

学位の種類 : 博士 (芸術工学)

学位記番号 : 課博第 131003 号

学位授与年月日 : 平成 26 年 3 月 15 日

学位授与種類 : 学位規程第 4 条 第 1 項該当 (課程博士)

学位論文題目 : Lion and Single-horned Bull: Shishi and Komainu: A Comparative Study

専門委員 : 小山明教授、戸田ツトム教授、黄國賓准教授、山之内誠准教授、杉浦康平 (本学名誉教授)

審査結果の要旨

[論文の要旨]

本論では、日本の神社入り口の左右に位置する獅子と狛犬の起源とその変遷を、エジプト、メソポタミア、イラン、ガンダーラとインド及び中国の守護神像を比較研究することを通して、図像学的な調査と分析を行うことを目的としている。

研究の方法としては、西アジアから伝播した獅子と狛犬の体の表面に見られる「獅子模様」と、狛犬の頭にある「一角」という二つの視覚的特徴を観察し、この獅子と狛犬にみられる二つの視覚的特徴を、太陽と月との関係に重ね合わせて論じている。

まず、獅子の身体に見られる獅子模様という渦巻き状の形について観察し考察を行っている。この模様の歴史的な起源はエジプトのライオン像にあり、さらに、メソポタミアとイランにおいてもライオンや場合によっては他の動物にも同じ模様が用いられている。本論では、最初にこの渦巻きの模様とこれらの動物に象徴される太陽との関係について論じ、次に、狛犬と西アジアで守護神として使われた一角牛との比較をふまえて、狛犬の一角が西アジアの図像から継承した特徴であり、月の再生の力を象徴するもので、あることについても論じている。

論文は以下の三つの章から構成されている。第一章においては、アジア文化における守護神としてのライオンの役割を紹介している。

1. 宇宙のゲートの守護神としてのライオン、2. 太陽の守護神としてのライオン、3. 獅子座、4. 儀式で使われたライオンの寝台、5. 聖なる場所の守護神としてのライオン、6. 神がそれに乗ることのできるライオン、7. ライオン柱、8. 阿吽のライオン、9. ライオンのスフィンクス、などが各文化においてどのような変遷が見られるかを図表化することで明らかにしている。

第二章においては、日本においては獅子模様と呼ばれる渦巻き状のモチーフについて、各文化ごとに調査を行っている。博物館収蔵物や書物などのアーカイブより収集されたその膨大なモチーフの例は、殆どが円形のモチーフを表しており、太陽の象徴として解釈されている。西アジアでみられるこの模様はライオンの肩の部分に描かれ、ライオンの背後から昇る太陽を表している。同時に渦巻状のモチーフは死と再生および聖と俗にみられる変換と変化、またその過程や時間そのものを表したものであり、その図像学的な意味を、聖なる場所と俗との境界を意味するライオンと牛の役割と一致する。左右対称の構造は、宇宙への出入り口(ゲート)を守るライオンの役割を示したものであると考えられる、と分析している。

第三章においては、狛犬の角の起源と図像学的な意味を考察している。獅子と狛犬の初期の像を見ると獅子の方はライオンと似た動物として描かれているが、狛犬はライオンよりもむしろ牛に類似する動物として描かれており、獅子と狛犬の両者は外觀が大きく異なっている。本論では、狛犬の「一角」の起源は西アジアにおいて守護神として使われていた牛像にあると考察している。西アジアの一角牛像の影響により「兜(じ)」という想像上の動物が中国で誕生し、そして狛犬は児の影響で生み出された。西アジアでは角の図像は月と深い関係にあり、イランの神話においては角は月の再生の力を象徴している。中国の古代文献によると、同じ解釈をもつ図像は中国に伝播し、兜も月に関係し、角は月の本質をとらえたものであることが考察されている。

最後に、獅子模様は太陽とその地下と地上の旅を象徴し、その変換と変化を象徴する渦巻状の形は獅師が境界を示す役割を担っていることと合致すること、そして狛犬の角は西アジアの牛の角に基づくもので、月の再生の力を表していること、角は狛犬の外觀が獅子と類似した動物へ変化を遂げた際にも、狛犬の頭上に残ったものと考察している。

[評価]

研究は、古代オリエント文明の東進—インド、遊牧民族圏、中園、韓国をへて日本へと渡來した文明史の流れ、その重層性を想起させる興味深い指摘である。「獅子」と「狛犬」。日本の神社・仏閣の聖域を飾る一対の聖獸のデザインの背後に潜むエジプト・オリエント諸国の聖獸信仰と造形手法に目を向け、「獅子」の流れを「ライオンの聖性」を探り、「狛犬」の姿に見え隠れする造形語法を古代の「聖牛信仰」に結びつけて考察している。この論考の高く評価すべき点は、獅子の力の表象、太陽イメージとの結びつきを示す師子の体表文様」の探索である。細部に刻まれ、ともすれば全体像の中に埋没しがちな体表文様、とりわけ渦巻文様の種々相は、多量の資料の重層化、その分類・整理によって、ユーラシア大陸を西から東へと移動する「聖性を示すシンボル探求」に対する興味深い一例となる。

一方で、エジプト・オリエントの牛や「一角牛と狛犬」の関係づけは、獅子ほどの説得力がないものになっている。なぜ牛の姿が消え、犬、あるいは一角の獅子へと姿を変えたのか。この問題を考えるには、日本における「牛の聖性」の位置づけはどのようなものであったのかを調べねばならない。研究の継続が期待される。

論考は、現代のグローバル文明論へのよき一例となり、また、新しい造形理念・造形語法の探究を目指す神戸芸術工科大学にとっても、重要な研究論文となると考えられる。

平成 26 年 1 月 15 日、芸術工学研究科において、審査員全員出席のもとに論文の説明を求め、周辺事項も含めて質疑応答をおこない、合議の結果、本論文執筆者は博士(芸術工学)の学位を受けるに十分な資格があることを全員一致で確認した。